

SPARC Japan セミナー 2024

「オープンアクセス義務化の先にあるもの:来るべき世界に向けて」

オープンアクセス時代の情報リテラシー

2025年1月30日(木)

のずえ としひこ

野末 俊比古(青山学院大学)

tnozue@ephs.aoyama.ac.jp

自己(話者)紹介

- ・ 現職・・・**青山学院大学**教育人間科学部教授・学部長、
同大学**革新技術と社会共創研究所**副所長・
「近未来の図書館と新しい学び」研究プロジェクトリーダー
- ・ 職歴・・・学術情報センター助手、文部省社会教育官、
青山学院大学准教授、国立情報学研究所客員准教授 など
- ・ 社会活動・・・日本図書館協会図書館利用教育委員会委員長、
国立国会図書館科学技術情報整備審議会基本方針検討部会長、
東京都立図書館協議会議長、日本教育情報学会理事 など
- ・ 専門分野・・・**図書館情報学、教育情報学** など
- ・ 研究関心・・・情報リテラシー教育、学習資源(教材)開発 など

オープンアクセス時代の(学術)情報利用

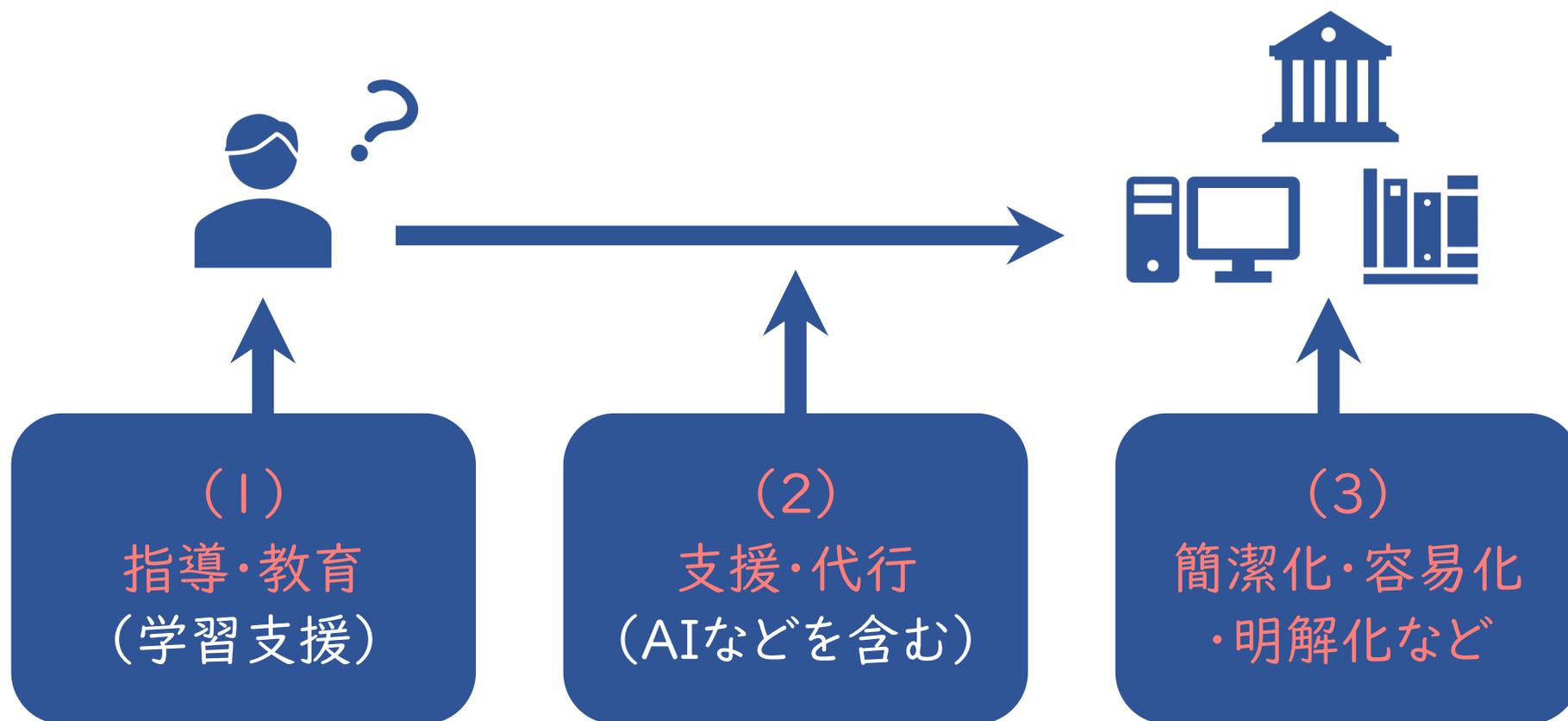
	これまで	これから
流通	研究の成果(論文など) 専門家による質保証(査読など)	研究の素材(データなど) 利用者による“質”評価
管理	メディア(形態)に基づく 資料(群)/コレクション アナログの延長・対比 検索(データベースなど)	コンテンツ(内容)に基づく 情報(源)/リソース “デジタルネイティブ化” 探索(AI 利用などを含む)
利用	(狭義の)研究者 (狭義の)研究のため 伝統的な教育(受け手)	さまざまな利用者(市民) 幅広い(新たな)用途 主体的・探究的・協働的な学び(作り手)

情報リテラシー観の展開・転換

これまで	これから
汎用性 （とその応用） 社会（コミュニティ）における生活（機能）に必要な情報の“読み書き（活用）能力”	包括的な把握と“ 文脈 ”に 応じた構成 分野・領域などと利用の目的や 利用者の意思など
伝統的な学力（能力）観 技能が中心	新しい学力（能力）観 技能（カラダ）+思考（アタマ）+情意（ココロ）
図書館・授業などごとの対応 プログラム型の教授学習法	カリキュラムに基づく／協働的な対応 プロジェクト型の教授学習法
習得・向上すべき （目的化） 図書館などが教育・指導できる／すべき	状況などに応じて （手段として） 教育・指導以外のアプローチも

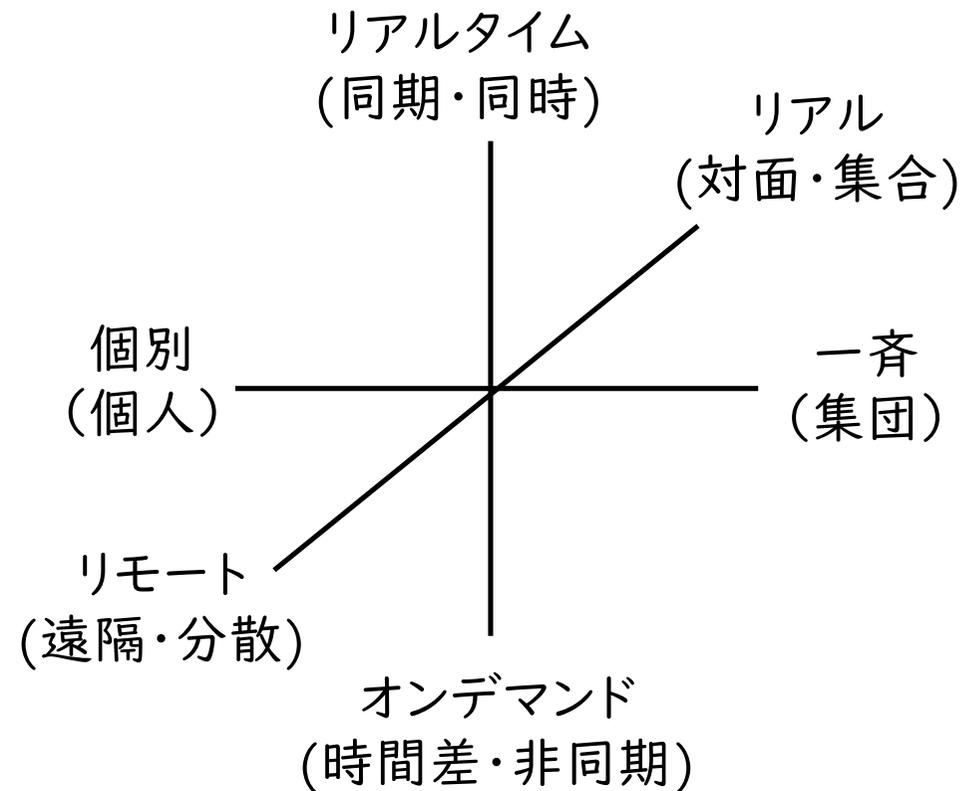
野末（2014）「情報リテラシー教育の『これまで』と『これから』」『情報の科学と技術』61（1）

利用者とシステムとの“ギャップ”をどう埋めるか／縮めるか —情報リテラシーをめぐる三つのアプローチ—



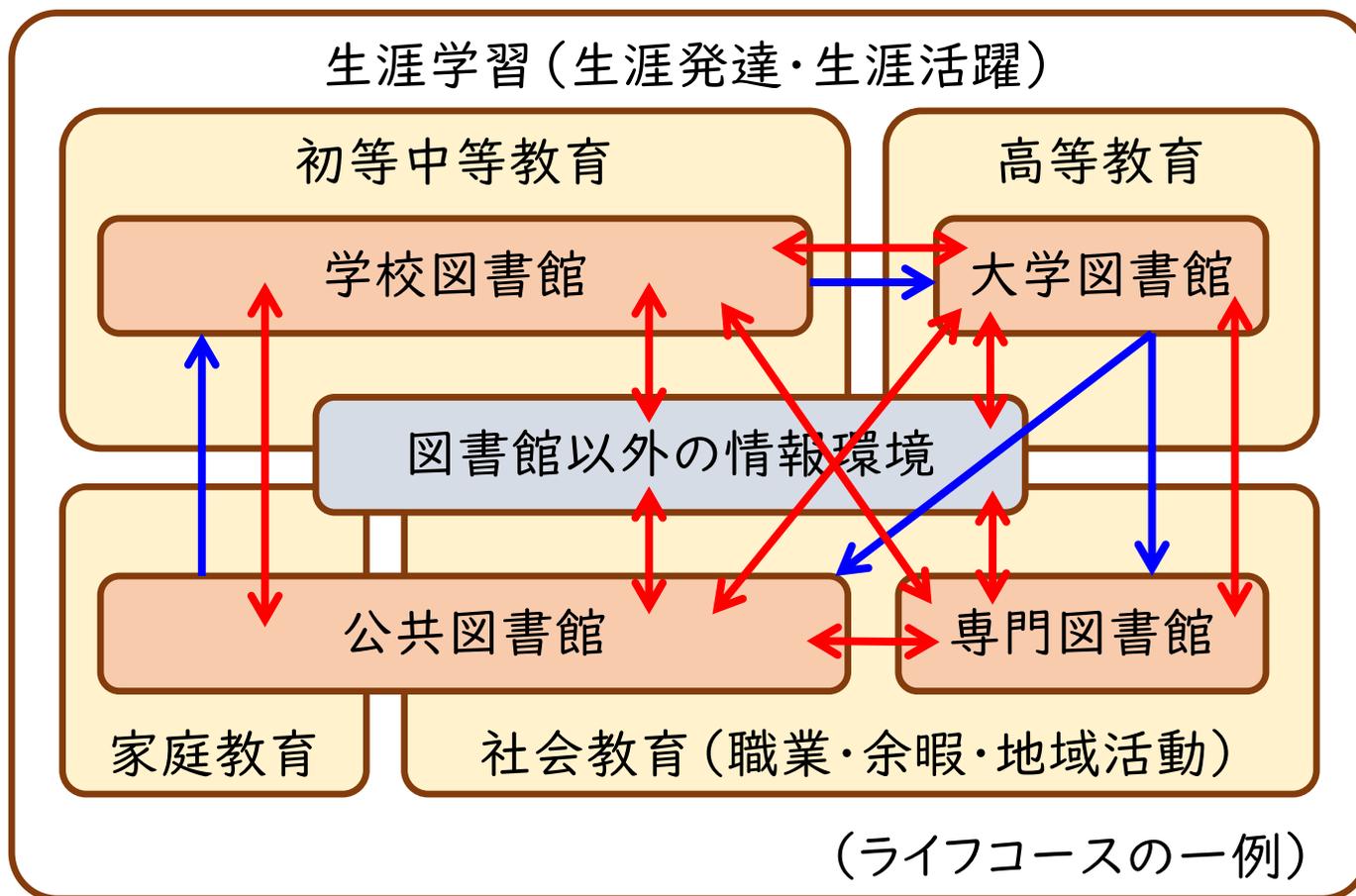
(1) 図書館サービスとしての情報リテラシー教育

- ・ 前提・必要となるもの
 - ・ **カリキュラム**に基づいて
 - ・ 学内外との**協働**
 - ・ **テクノロジー**の活用 (DX)
- ・ 指導のデザイン
 - ・ Whom……利用者
 - ・ Why……文脈 (目的)
 - ・ What……内容 (目標)
 - ・ When/Where
 - ・ /Who/How……**方法** →



野末 (2009) 「情報リテラシー教育における
図書館員の役割」『短期大学図書館研究』(28)

【参考】館種を越えた情報リテラシー（教育）の枠組み



← 時間軸

↔ 空間軸

日本図書館協会図書館利用
教育委員会（2022）「情報
リテラシー教育の新たな実践に
向けて」第108回全国図書館
大会第9分科会発表資料

(2) 情報利用における支援・代行

直接的(人的)な支援

- ・ レファレンスサービス
- ・ チューター・TAなどによる相談 など

間接的な支援(ツールなど)

- ・ 各種マニュアル・サイン
- ・ パスファインダー など

図書館以外による“支援”(協働)

- ・ 授業時の文献リスト
- ・ 各種ウェブサービス など

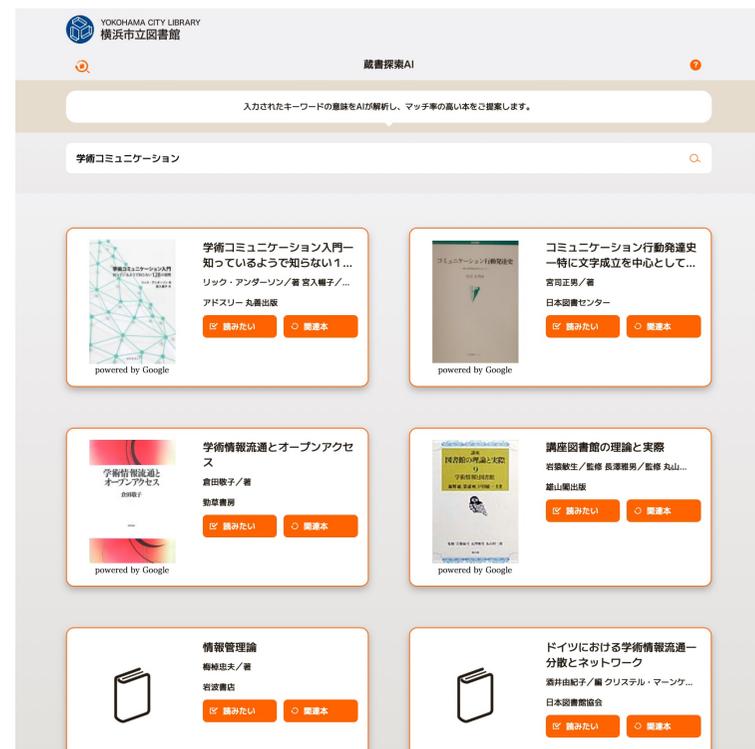
テクノロジーを活用した支援

- ・ ディスカバリーサービス
- ・ AIによる情報探索 など

AIを活用した蔵書探索システム

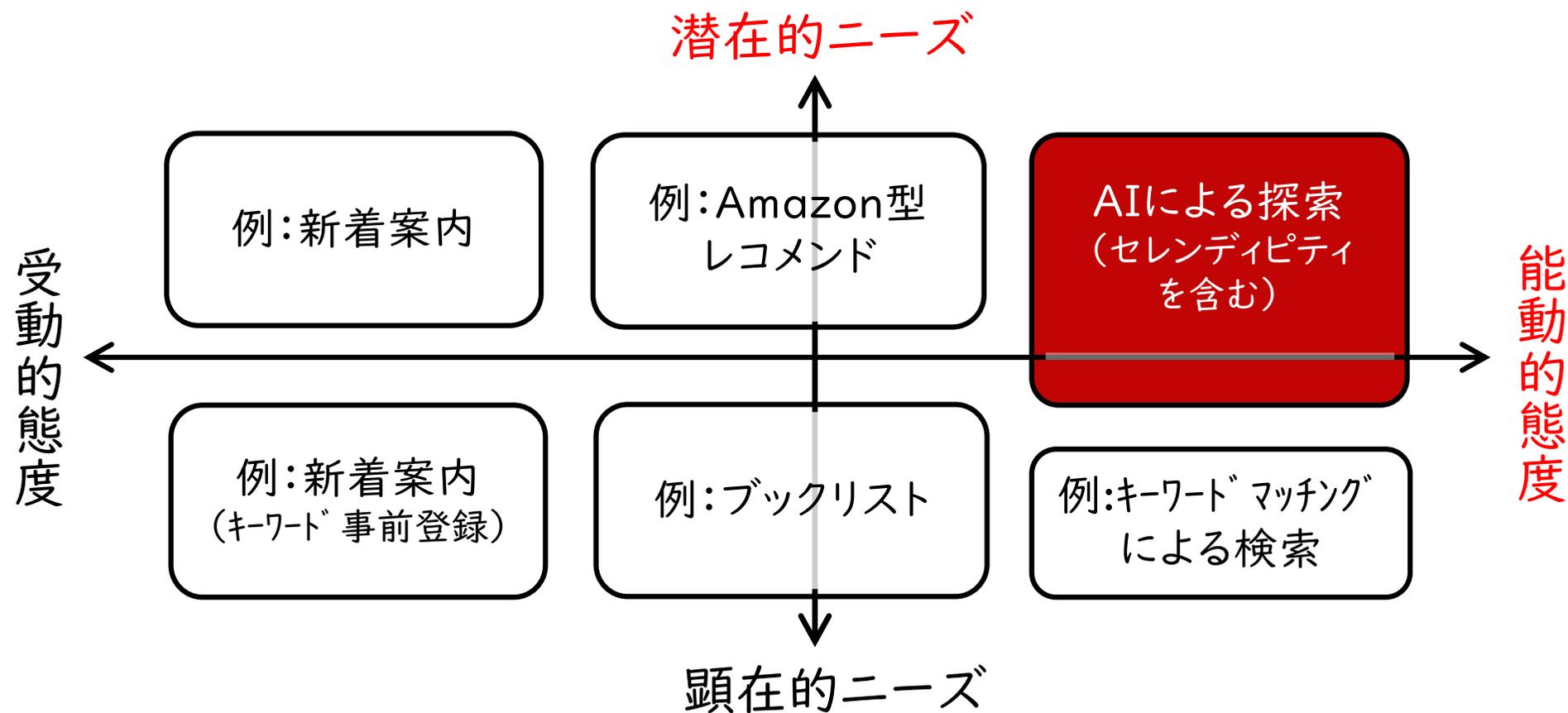
- 昨年1月以降、**公共図書館に順次、導入・稼動**
- 青山学院大学革新技术と社会共創研究所「近未来の図書館と新しい学び」研究プロジェクトにおける**富士通 Japan との共同研究**にて開発
- AIが入力内容に“近い”文献を学習データから提示
- **AI だからこそ見つかる場合と上手いいかない場合**
- 改良に向けた研究・開発を継続中

野末ほか(2024)「AIの活用による学習者に最適化した文献探索システムの社会実装」『日本教育情報学会第40回年会論文集』など



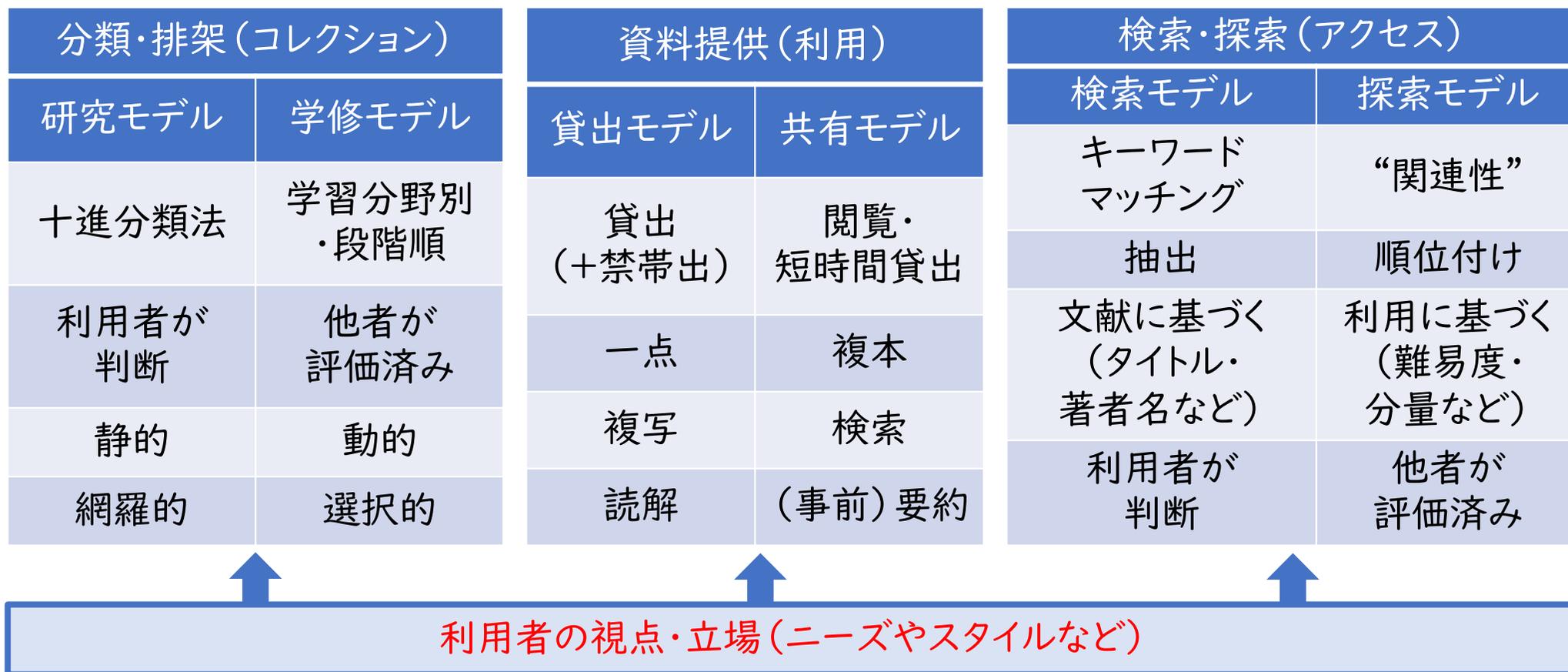
横浜市立図書館における表示例
(<https://newopac.library.city.yokohama.lg.jp/home>)

AI が意義を発揮する領域 (仮説)



(3) 利用者志向の情報利用環境

文献(資料)の利用に係るリテラシーの必要性を軽減・縮小するモデルの例



【参考】文献探索・選択におけるニーズ —実態に関するアンケート調査より—

- ・ 実施時期・・・2023年3月
- ・ 実施方法・・・インターネット
- ・ 調査対象・・・480人（「10代」から「60代以上」の各男女40人）
- ・ 調査項目・・・年齢・性別・職業、本の探し方・選び方、探索・選択において困っていること、読書頻度、図書館利用頻度 など
- ・ 集計結果・・・読書や図書館利用頻度などによって異なる課題

野末ほか(2023)「私たちは本をどのように探したり選んだりしているか」『大学教育学会第45回大会発表要旨集録』

【参考】利用者のグループ化 - 図書館利用頻度(Q8) × 読書頻度(Q4)

	週2~3冊	週1冊	月2~3冊	月1冊	1冊/2~3月	1冊/6月	1年1冊	読まない	合計
週2~3回	4	2							6
週1回	5	8	4		1		1	1	20
月2~3回	8	18	16	6	1	1	1	2	53
月1回	2	1	7	10	3		3		27
1回/2~3月	1	3	5	3	12	9	2	2	37
1回/6月		3	8	8	9	9	9	6	52
年1回	6	9	8	12	14	14	43	21	127
利用しない	2	8	5	9	9	17	30	78	158
合計	28	52	53	48	49	50	89	111	

I

II

III

IV

【参考】困っていること(Q6)×利用者グループ

縦[%]	I 本(+) 図書館(+)	II 本(+) 図書館(-)	III 本(-) 図書館(-)	IV 本(-) 図書館(-)	人数
興味	17.6%	18.9%	20.4%	28.6%	80
キーワード	19.8%	11.1%	16.1%	4.8%	49
類書・関連本	17.6%	4.4%	8.6%	6.0%	33
ジャンル・分野	19.8%	12.2%	18.3%	7.1%	53
候補が多い	28.6%	18.9%	18.3%	9.5%	70
難易度	14.3%	5.6%	16.1%	15.5%	48
分量(ページ数)	3.3%	1.1%	10.8%	10.7%	25
他人の評価	9.9%	4.4%	6.5%	6.0%	24
概要・目次	8.8%	3.3%	9.7%	3.6%	23
その他	0.0%	0.0%	2.2%	1.2%	3
困っていることはない	20.9%	44.4%	34.4%	34.5%	122
人数	91	90	93	84	

グループごとに生じやすい課題

本をよく読む人が感じやすい課題

図書館をよく利用する人が感じやすい課題

キーワードが思いつかない

ある本の類書・関連本がうまく探せない

ジャンル・分野が
わからない

候補となる本が多すぎる

興味をひく本が見つからない

自分に合った難易度の本がわからない

自分に合った分量の本がわからない

他人の評価を参考にしたい

受動的 ←

→ 能動的

まとめにかえて

- (学術)情報流通・利用の変容
- 情報リテラシー観の転換
- 情報リテラシーへの三つのアプローチ



- **コーディネーター**としての図書館員
 - 図書館の資源を活用した「学び(成長)」のプロセスの構築
情報資源(教材)、物的支援(教具)、空間資源(教室)、人的資源(教師)
 - 研究と教育・学修(学習)の支援・推進
リサーチリテラシーの育成

ありがとうございました

- 本発表の一部は、国立国会図書館第17回科学技術情報整備審議会（2024年8月9日）における話題提供などを再構成したものです
- 本発表の内容は、所属・関係する組織などではなく、個人の見解・認識に基づくものであり、試（私）論を含みます
- ご意見、ご質問はいつでも歓迎します（tnozue@ephs.aoyama.ac.jp）